

早稲田大学 第一文学部 古文 講評

〔総合分析〕

<p>試験時間</p> <p>国語 90 分（現代文 2 問 古文 1 問 漢文 1 問）</p> <p>出典</p> <p>『木幡の時雨（こはたのしぐれ）』 （一九・姫君の美貌／二〇・時雨の秋、石山詣での式部卿宮との出逢い／二一・宮のかいま見）</p> <p>解題</p> <p>擬古物語。作者未詳。鎌倉期の成立か。『住吉物語』『落窪物語』などの継子いじめの話型に従いつつ、『源氏物語』の夕顔・浮舟、『狭衣物語』の飛鳥井姫君のごとき女の悲恋を語られる。</p>

〔大問別講評〕

大問番号	設問番号	コメント	難易度
三	問十六	<p>〈条件作文〉</p> <p>早稲田大学特有の設問。他学部でも頻繁に出題される。第一文学部では 01 年以来 4 年振りの出題。自立語一付属後・補助動詞の順など文法法則を踏まえ語の前後関係を判断する設問だが、選択肢ホの「なり」の意味と順番の判断は極めて難しい。組み合わせた本文は「紛れさせ給ふまじきに」となる。</p>	難
	問十七	<p>〈空欄補入〉</p> <p>第一文学部で例年問われる形式。本年は形容詞・形容動詞を補うもので、選択肢の単語も難解なものを含まないのも、第一文学部の空欄補入としては比較的解き易いものであった言えよう。並立の関係、主語述語の関係、など文の構造を捉える判断力が必要。</p>	標準
	問十八	<p>〈傍線部訳〉</p> <p>解釈を求める傍線部は昨年 2 カ所であったが、本年は 3 カ所。例年の出題。傍線部のキーワードを捉え、文脈に照らし合わせての判断力が必要。</p> <p>1・形容詞「いみじ」の文末用法の解釈は基本にして頻出。主語の判断と文脈の把握が必要。</p> <p>3・副詞「やをら」は頻出語。この語のみでも選択は可能。また「やをら」以外の部分に含まれる語と選択肢との対応を精確に捉えられても選択は容易。</p> <p>4・連語「あるやう」は事子細・わけの意。併せて「暮れぬれば」以降の</p>	平易 平易 標準

	問十九	<p>状況を巨視的に把握して親王の心情であることも判断する必要がある。「あるやう」は早稲田予備校『古文β・Ⅱ』に引いた『大鏡』の中でも「あるやうこそは」の形で学習した。</p> <p>〈人物特定〉</p> <p>傍線を付した人物を特定させる設問。大学入試で問われる典型的な形式。第一文学部では、人物を特定させる設問は01年・97年に課されている。述語との対応、敬意の有無、状況の把握など多角的な判断力が必要とされるが、ヒントをつかみやすい。</p>	平易
	問二十	<p>〈内容一致〉</p> <p>典型的な出題形式。それぞれの選択肢の内容と本文の内容とを対応させようとしても、選択しづらい。各選択肢の不具合を見つけて消去する方法が効果的であろう。しかし例年、第一文学部で出題される内容一致の選択肢は、判断に誤るものを含むので、迅速かつ精確に判断する力を養いたい。</p>	標準
	問二十一	<p>〈文学史〉</p> <p>いくぶん手の込んだ出題のように見えるが、第一文学部の文学史としては平易であろう。文学史の基本的な学習をしておけば判断は容易。傍線部の「女三の宮」及び「柏木」は源氏物語の登場人物。</p>	平易

〔総合コメント〕

難易度

第一文学部としては標準「昨年と同じレベル」。

分量

昨年とほぼ同じ。約1300字。但し過去5年の第一文学部の本文の分量に比べ、昨年本年と増加の傾向にある。ちなみに、02年は約900字、03年は約1100字、04年は約1300字の本文であった。設問の数は、昨年の7から6へと1題減ったが、枝別れした設問の数では11から12に増えた。

出典

まれ。早稲田大学に限らず、近年、例えば『海人の刈藻』『松浦宮物語』や『山路の露』のような中世の王朝物語が出題される傾向にあるが、『木幡の時雨』が出典となることはめずらしい。主要出典の梗概を読むような学習法では対応できない。未見の本文を読み解く力を養うことが必要。なお本年も第一文学部は出典を示していない。

形式

すべて客観式。条件作文・空欄補入・解釈・人物特定・内容一致・文学史の6題、これまで第一文学部の出題形式を超えるものではない。問十六の条件作文は早稲田大学特有の設問。第一文学部では01

年『閑居友』、他の学部では、01年人間科学部『続古事談』・98年政治経済学部『徒然草』・02年『讃岐典侍日記』・99年『十訓抄』に出題されている。